

## 重度・重複障害児の学習における「意欲」とは何か？\*

熊川 宏 昭\*\*

本論では、重度・重複障害児の学習における「意欲」について、その知見を概観すると同時に、それを踏まえて、「意欲」の発達位相に関するモデルを提起した。最後に、同じく諸家の研究を概観しながら「意欲」を高める支援のあり方とその高まりを見る観点について整理を行った。

キーワード：重度・重複障害児 意欲 意図 能動性 主体性

### I はじめに

現在の学校教育において、子どもに求める姿の根本は、学習指導要領にあるように、「生きる力」であり、すなわち「自ら学ぶ力」である。

これを特別支援教育、特に重度・重複障害児の教育のフィールドで考えてみると、重度・重複障害児における「生きる力」「自ら学ぶ力」の重要なファクターとして考えられるものに「意欲」があると考えられる。

しかし、この「意欲」という言葉は、「外界へ関わる意欲」「コミュニケーション意欲」と様々な文脈で使用されることが多いにもかかわらず、その明確な内容は漠としている感がある。また、多様な実態の子どもがいるので、おしなべて意欲を論ずるのも検討が必要である。

以上のことも踏まえつつ、本論では、より大きな共通項としての意欲（すなわち、志向性、能動性、意図性、主体性、等も含むもの）に関する諸家の知見を概観し、それをもとに意欲の概念的モデル、その支援と評価のあり方に関して整理を行うことを目的とする。

なお、ここでいう重度・重複障害とは、特殊教育に関する調査研究会(1975)による報告「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について」に基づき、重複障害とは、「学校教育法施行令22

条の3」の盲・聾・知的障害・肢体不自由・病弱のうち、二つ以上併せもつもの

重度・重複とは、障害が重複の他に、以下に示す状態の者

#### ① 発達の側面から見て

精神発達の遅れが著しく、ほとんど言語を持たず、自他の意志の交換及び環境への適応が著しく困難であって、日常生活において常時介護を必要とする程度の者

#### ② 行動的側面から見て

破壊的行動、多動傾向、異常な習慣、自傷行為、自閉性、その他の問題行動が著しく、常時介護を必要とする程度の者

のうち、主に①の状態の子ども達を想定して論を進める。

### II 重度・重複障害児の学習における意欲に関する知見の概観

#### 1. 周辺領域、主として乳幼児の発達研究等から一基礎的知見を中心として

まず、先にも述べたが、そもそも意欲とは何であろうか？このことに関して粕谷は、幼稚園教育の立場から以下のように述べている。「・・・幼児が自主的・主体的に活動がなされるためには、自己の活動意欲が生み出されなければならないが、これらはほとんどが環境刺激に拠るものである。幼児は環境を感じる（見る、聞くなど）ことから始まり、そこから何らかの刺激を受けることで活動が行われていくのである・・・（中略）・・・

\* What is "volition" on support to profoundly multiply disabled children ?

\*\* 福岡教育大学障害児治療教育センター研究部員 (第1部門) 福岡県教育センター

保育環境としての場は人的・物的空間から構成され、幼児はそれらの環境の中に自分もそれらとの関係を具体的につくってみたいと思うことで、主体的な活動につながるのである。」

また税田(2003)は、近年の「共同注意」をキーワードとした動作法における理論と技法の展開の基礎研究として、乳幼児期のコミュニケーションの定型発達過程と、両者の発達の関連性について検討している。その中で、乳幼児期において自己及び対象のコントロール発達が他者との注意の共有・対象を介した原初的やりとりに関連するだけでなく、さらには、他者のもつ意図性・情動を理解・共感した上での自己行動の調整という、より高次のコミュニケーションスキルの獲得にも影響を及ぼしているとしている。

船橋(2003)は、1乳児の縦断的観察から、乳児の移動運動発達が進展することによって、養育者に対して能動的な情緒的コミュニケーションを増大させていくことを示し、これに呼応するように養育者も応答的な関わりを増大させていくことを明らかにしている。

以上のことから考えても、「意欲」の高まりには様々な発達の要因が係わっていることが推察される。

## 2. 重度・重複障害児の実践研究から

Table 1. 興味の側面 (大沼,2002)

興味	原興味	◎子どもの内面に潜在的に在るもの (本能・欲求・衝動) ①事物を探りたい (探究的原興味) ②食べたい、等々 (生存的原興味) ③何かを表したい (表現的原興味) ④人とかかわりたい (コミュニケーション的原興味)
	現興味	◎つくられていく興味→現興味 → 創造的興味 → 価値的興味 → 目的的兴趣 → 結果的興味 ①事物を探る (探究的原興味) ②食べる等々 (生存的原興味) ③何かを表す (表現的原興味) ④人とかかわる (コミュニケーション的原興味)
	方法的興味	◎つくられてきた興味→方法的興味 → 今在る興味 → 動機付けの興味 ☆引き付ける対象一般

大沼(2002)は、「興味」という視点から重度・

重複障害児の意欲に関わる側面をとらえ、左記のように整理している。

そして、この中でベースとなる「原興味」を誘発する学習としての「感覚運動遊び」の重要性を指摘している。

また対象としている子ども像が少し異なるが、鍋木(2003)は、意欲を個別の指導計画作成に反映させるために、次のような整理を行っている。



Fig.1 意欲の視点 (鍋木,2003)

まず、「意欲」を「意」と「欲」に分けて考え、「意」を結果の成功率や確からしさ、「見通し」としている。続いて「欲」は、やろうとすることへの魅力とし、8つのカテゴリーを設けている。さらに「意欲の評価」については、Fig.1にあるような項目で「子どもの状態」として評価を行っている。

徳永(2003)は、発達初期にある重度・重複障害児がどのように自分へのかかわり、対象物へのかかわり、他者へのかかわりを発達させていくのかをモデル化し、7つの段階を設定している。

- 段階① 混沌とした世界
- 段階② 自己・他者・物のゆるやかな分化
- 段階③ 刺激的な他者 (二項関係の形成)
- 段階④ 自分の自体の操作

段階⑤ 物の操作

段階⑥ 初期の三項関係

段階⑦ 他者意図の理解

その中で、「段階④ 自分の自体の操作」において、自らからだを動かす中で、意欲の重要な側面と思われる意図感 (sense of volition) や自己効能感 (sense of own power, self efficacy) が芽生えるとしている。

佐藤・中谷(1992)は、発達に遅れを示す子どもでは、発達初期より外界に対する活動を積極的に展開しないという特徴があり、これは、障害児の能動性の問題としてとらえられるとし、能動性のもっとも早期の現れとして「おはしゃぎ反応」に関する研究を行っている。「おはしゃぎ反応」とは、乳児においてまず最初に体の動きが完全に止まり、対象への注視が生じた後、突然のように手足が振り上げられ、それと同時に微笑みや発声も生じるという一連の活気に満ちた複合的な行動のことである。このうち、対象をじっと注視する定位的な行動は活動への準備状態としての能動性、また、活気に満ちた複合的な行動は活動状態としての能動性ととらえられるとしている。またこれは、乳児が大人に率先して向けられる場合があり、主導性としての能動性も反映する。つまり、「おはしゃぎ反応」は、先に示した能動性すべてを反映する、としている。

で、子どもが主体性を発揮する要素をFig.2のように構想し、意欲を高める前提として「活動のまとまりがわかる」「見通しをもつ」ことを上げている。

Ware(1996)は、重度な障害が重複した子どもとの臨床的なかわりの中で、親や教師等の養育者を含めた応答性の高い環境が子どもに必要であり、そのような環境の中で、適切に環境が応答することで、子どもは多くの学習を行うとしている。そして、数多くの事例を挙げながら、コミュニケーションへと続く行動のつながりとして、

- ① 随意行動(voluntary behavior)  
環境とのつながりが推測されない腕の動き、脚の動き、発声等の行動
- ② 環境への意図的応答(voluntary response to the environment)  
近づく人を見上げる他の子どもの声に応じるような発声、他のスタッフの話し声に反応する。
- ③ 目的的行動(purposeful behavior)  
おもちゃをもつ、おもちゃをつまむを提案している。  
また、その後に意図的コミュニケーション(intentional communication);他者の注意を引きつけるための行動、手を伸ばして相手の腕に触る、顔を見て笑いかけるなどの行動が出現している。

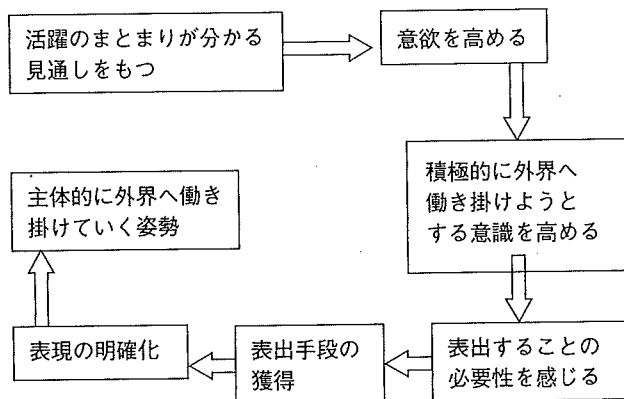


Fig.2 子どもが主体性を発揮するための要素の変化 (永田,2003)

永田(2003)は、肢体不自由と知的障害をもつ小4の男児に、情動的発声(道具的機能が確立していない発声)を意図的発声(他者とのやりとりで見られる特に要求等を伝えるためのツールとしての発声)へ変えていく支援を行っている。その中

### III 重度・重複障害児の学習における意欲の発達位相のモデル

以上、重度・重複障害児の意欲に関する先行研究を概観してきた。ここではそれらを参照しながら、重度・重複障害児の意欲の発達位相のモデルをFig.3のように仮定してみた。

まずこの中で、最初に出現すると考えられるのは、反射、換言すれば先天的志向性ともいえる、本来生まれながらにして人間が持つ外界への関心や動きである。これは上述した、Ware(1996)の随意行動(voluntary behavior)に該当するものと想定した。それがさらにさまざまな経験を経る中で、いわゆる定位反応、さらに因果性の理解を伴った意図的志向性へ変化していく。さらにそれは、快的情動と結びつき、期待や予期と言い換えてもよいものへ変わっていくと考える。

これに関して高橋(1986)は、感覚運動的水準で

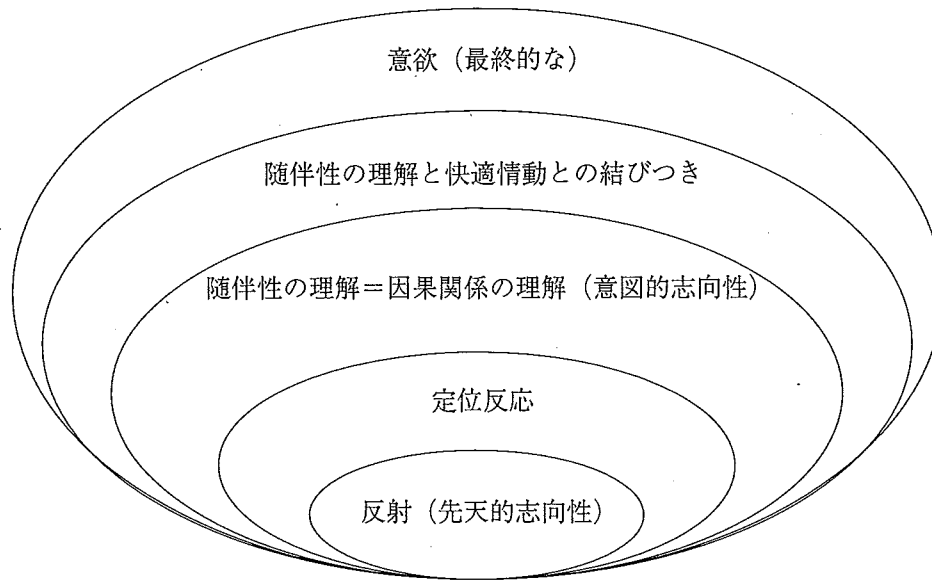


Fig.3 重度・重複障害児における意欲の発達位相のモデル案

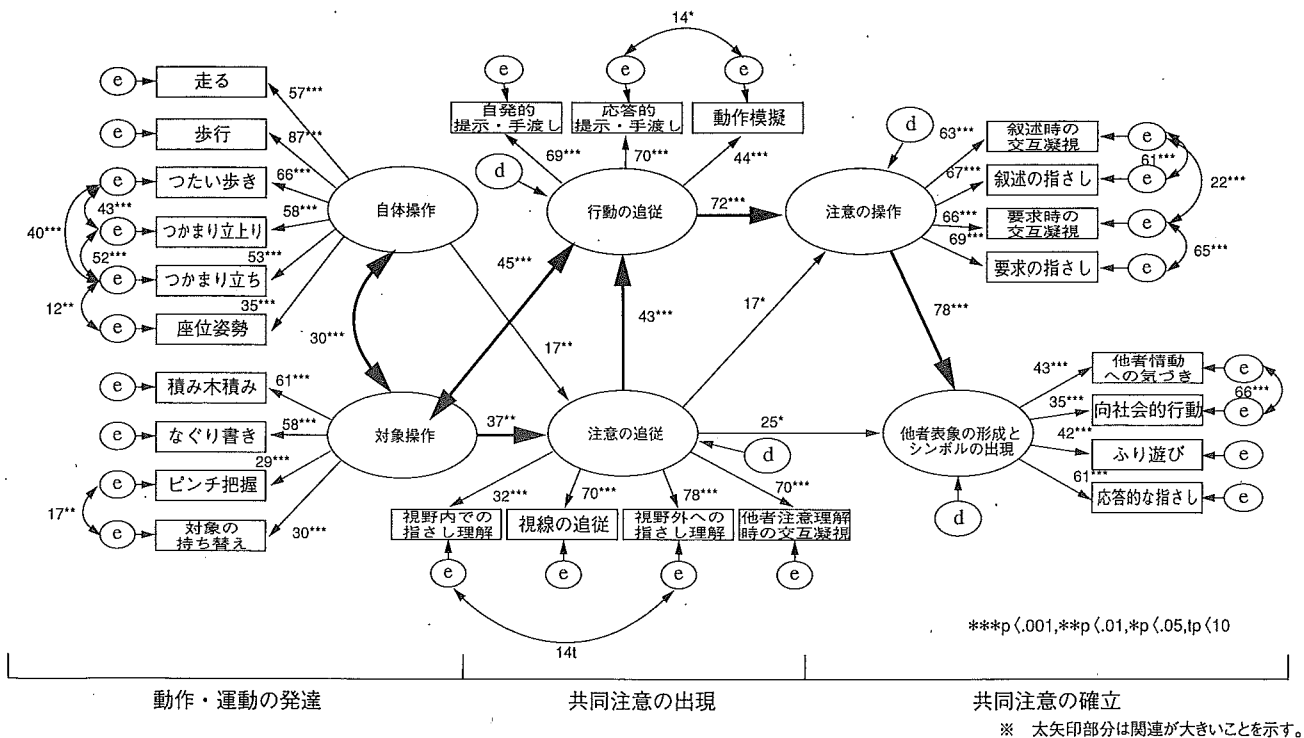


Fig.4 乳幼児期における動作とこころの発達の推移 (税田, 2003)

の期待反応の発生には、刺激の時間的規則性の認知が含まれており、これに基づき、刺激に対する予測や期待が可能になるとされている。

最終的には、これらの快的情動との結びつきは、永田(2003)がいうような活動の見通しと結びつき、必ずしも全てポジティブな結果でなくても活動を起こそうとすることも含めた意欲へとつなが

っていくと考える。

#### IV おわりに

—重度・重複障害児の意欲を高める支援のために  
以上、重度・重複障害児の意欲に関する先行研究のを概観し、それに基づく発達位相のモデルを提起した。

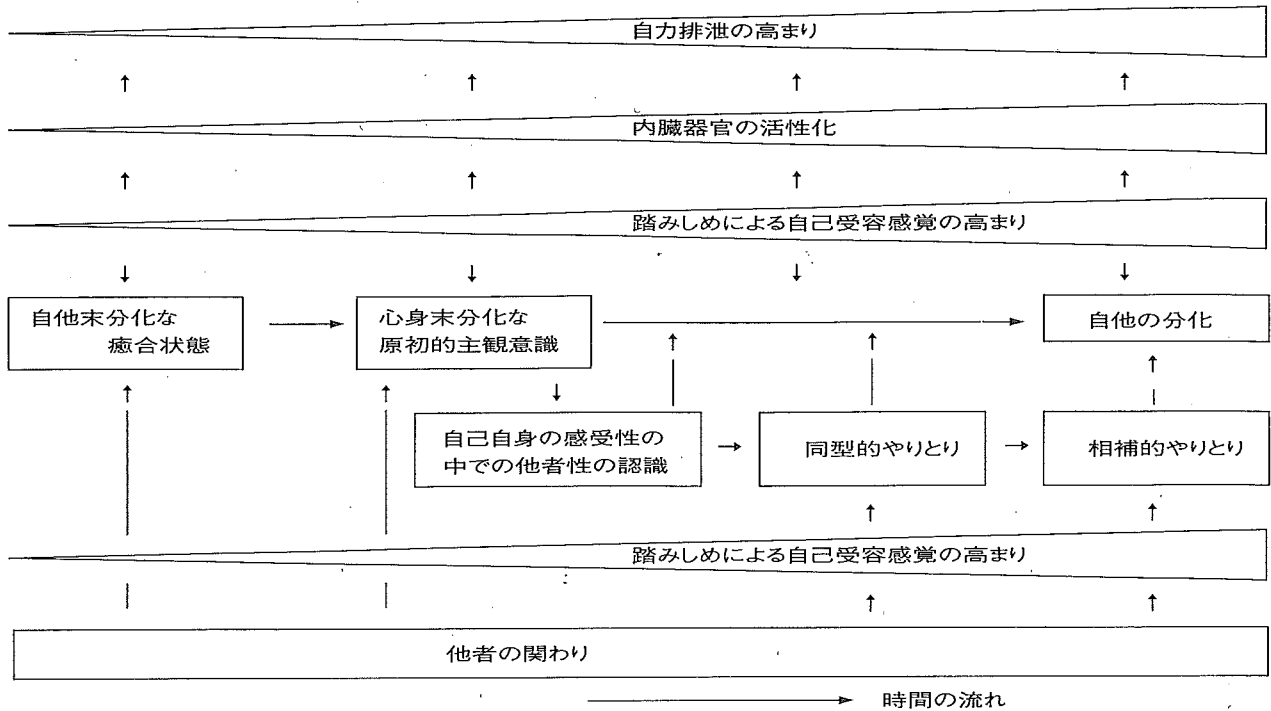


Fig.5 重度・重複障害児における立位での踏みしめと外界への応答の関連の解釈モデル (熊川,1998)

では、その意欲を高めるためにはいかなる支援が適切なのか？これに一つの示唆を与えるものに先に上げた税田(2003)の知見がある。この中で示されている6つの概念、「対象操作」「自体操作」「注意の追随」「行動の追随」「注意の操作」「他者表象の形成とシンボルの出現」の因果性のモデル (Fig. 4) が大まかな支援の方向性を示すものとして活用できると考えられる。

すなわち、重度・重複障害児の意欲を高めるためには、まず、自体（自分の身体）自体の活動を活性化していく中で、外界のいろいろな対象の活動を促し、次に、それを踏まえて他者への注意の追随（他者の注意している部分に自分の注意を向ける）あるいは行動の追随（一緒に動く、動かす）といった働きかけが重要になることが示唆される。

また、筆者(1998)も、一人の重度・重複障害児の立位での踏みしめと外界への応答の関連についての解釈としてFig.5のような内的変容のプロセスを仮説的に提起し、その変容の中核的な要因として、踏みしめによる自己受容感覚の高まりや、他者との関わりによる志向性の高まりを通じた自己意識の高まりを上げている。

それでは次に、支援をしていく中で、意欲の高まりをどこで見ればよいのだろうか？

例えばGraham&Jackson(1970)は、生理心理学的観点から、単一刺激直後に生起する一過性の心拍値の減少は定位反応を反映し、反応の大きさは新奇性の関数と考えられる、としている。このことから考えると、この反応の大きさは意欲の生理学的な現れと考えられ、意欲の一つの指標として考えられ得ると思われる。

またTrevarthen(1979)は、主体的過程を目に見えるものにする活動として、例えば、事物に注意を集中すること、結果に興味を持ちながら対象物をいじったり調べたりすること、出来事の進路を予測して顔を向けたりそむけたりすること、等を上げている。

以上見てきたように「意欲」ということは、自明のようで、実は曖昧としている。今後は実際の事例の支援を通しながら、より臨床的な「意欲」の内容とその支援の内容や評価について詳細に検討していくことが必要であろう。

## 文 献

- Graham, F.K., & Jackson, J.C. (1970) Arousal systems and infant heart rate responses. In L.P. Lipsitt, & H.W. Reese (Eds.), *Advances in child development and behavior*. Vol.5. New York: Academic Press. 60-117.

- 船橋篤彦(2003)乳児の移動運動発達により導かれる養育性の変容とはどのようなものか.発達臨床心理研究(九州大学大学院人間環境学府附属発達臨床心理センター発達相談部門),8,47-59.
- 鏑木 治(2003)提言—授業研究で実践を深めるために.発達の遅れと教育,11月号(No.555),日本文化科学社,21.
- 粕谷亘正(未公刊)遊びにおける素材のもつ意味.(<http://www.oggo.jp/cms/Lecture2.html>)
- 北島善夫(1993)重症心身障害者における人の働きかけに対する期待反応について—情動反応と心拍変動による検討—.発達障害研究,15(2),48-55.
- 熊川宏昭(1998)立位で足を踏みしめる活動の高まりに伴い、外界との応答に拡がりが見られた重度・重複障害児の事例に関する—解釈—Wallonの発達論の視点から—.福岡教育大学障害児治療教育センター年報,11,31-36.
- 税田慶昭(2003)乳幼児期における動作とこころの発達過程—構造方程式モデリングによる運動・コミュニケーションの発達連関の検討.リハビリテーション心理学研究,31(1),35-46.
- 佐藤正恵・中谷恭子(1992)障害乳児と健常乳児の「おはしゃぎ反応」の特徴—能動性の指標として—.特殊教育学研究,30(1),47-56.
- 永田 努(2003)肢体に不自由のある子供に発声での要求表現の広がり求めた研究事例—情動的な発声から意図的な発声へ—.教育実践研究報告(国立久里浜養護学校),20,105-118.
- 高橋 登(1986)幼児における予測(Expectancy)の発達—反応時間を指標にして—.教育心理学研究,34(1),1-9.
- Trevarthen,C.(1979)Communication and cooperation in early infancy:a description of primary intersubjectivity. Bullowa,M.(ed) Before Speech,Cambridge University Press,  
(鯨岡 峻・鯨岡和子 編訳著(1989)母と子のあいだ 初期コミュニケーションの発達.ミネルヴァ書房,69-101.)
- 徳永 豊(2003)自己—対象物—他者の発達に関する子どもの体験モデル—アンパンマン・モデルの提案—.平成11年度～平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書,53-59.
- 特殊教育に関する調査研究会(1975)重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について(報告).
- 大沼直樹(2002)重度・重複障害児の興味の開発法—四つの感覚と四つの興味—.明治図書.
- Ware,J.(1996)Creating a Responsive Environment - for people with profound and multiple learning disabilities - .David Fulton Publishers;London